

アンドレアス・フクダ著

「日本における神の探求」

“Das Suchen nach Gott in Japan”
von Andreas Fukuda ofm

川田 熊太郎

一 著者

これは一冊の書籍ではなくて、一篇の論文である。『フランシスカン研究』（第五十四巻一九七二、第四分冊、頁三五八—三六九）所載。Dietrich-Coelde-Verlag, Werl/Westfalen.

もともと、これはフライブルクで、一九七二年三月八日に、成人教育講習会の一部として、なされた講演である。

著者は、その受洗名がアンドレアス Andreas である所のフクダ氏。恐らく、福田氏であろう。フランシスカン教団所屬。彼が記している所によれば、彼に日本にて教理学を教えた教授はフランシスカン教団所屬のマウルス・

「日本における神の探求」（川田）

ハインリクス Maurus Heinrichs 氏であり、この人はドイツ人であり、ベーリンにて支那学を研究し、その後、六年間支那に留学し、そのうち三年間は宣教師をつとめた、そして一九五四年以来は東京で神学を講じている。

この長きにわたりて日本人の思惟を研究したる教授が、ある時、フクダ師に言った、「今は私は日本人の思惟方法を以前よりは幾分かよく理解することができ、しかし私は依然としてドイツ人たることに変わりはない。思うに天国にても私は変わらずにドイツ人であり、そして君は永遠に日本人であり続けるであろう。」と。

これに結びて、フクダ師は言う、二者の間の差異は極めて大であるから、ヨーロッパ人とアジア人とは相手の・対立している思惟方法を——厳密な意味にとれば——決して理解しあうことができぬであろう、と。

それにもかかわらず、此の教授は、彼の著作『カトリック神学とアジア的思惟』Katholische Theologie und asiatisches Denken, Mainz 1963, S. 7.) のうちにて次ぎの通りに書いてある——

政治的及び経済的関心が今日においては西と東とを結合しているのであるが、その結合の土台として我々はこれを言うことが出来る、即ち、カトリックの人々は東方の人々に、彼等が西方の伝統を、特にキリスト教をも、大いに熱心に考究することを、先ず第一に宗教的・世界觀的な立場から、懇望すべきである、と。

フクダ師はいう。周知の如く、かなり多数の、アジアの哲学者達は、たとえば、人間とは何か、実在とは何か、絶対者とは何か、などと、人間に、また人類史に関する諸問題を徹底的に研究している。しかし、これは彼等自身の思惟方法に従ってなされたのであって、彼等は、あらかじめ、キリスト教の救済

の教理を知っていたのではなかった。また現代のアジアの哲学者達、殊に日本人は、彼等自身の東方的思想財産を考究し、それを幾多の例によりて、解し易くすることに、熱心に努めている。

かく言う著者は彼の師の言を体し、また彼自身の研究に基づきて、西と東との相互理解を促進することを、『日本における神の探求』を両者の接触地点として、達成しようとしている。

以下、先ず、フクダ師の言に聴こう。

二の1 日本における宗教的状况

日本人の神の概念を理解するが為には、先ず日本人の人生観が、自然の諸力及び祖先の崇拜たる神道と儒教と仏教とを土台とすることを心にとどめておかねばならない。しかし、また忘るべからざること、それは、この日本人の人生観がそれ自身に特有なる・全く特定の性格を持っていることである。この性格は、数千年にわたりて東方の一地域において全く固有なる発展をとげたもの、また支那及び印度の文化を広く同化することによりて特有にして独立なる文化を造り出したものである。

これが意味するもの、それは次ぎの如くである。日本人は現象界を絶対者と認め、普遍者の世界をよりも、実践及び具象の領域の直観の世界を意義あるものとする者たることである。この思惟方法は現象界を絶対者なりとして、現象界の外にある存在の容認を尽く拒斥する。この日本的思惟は、勿論、支那の儒教と印度の仏教とから大なる感化を受けている。しかし、日本国民は固有にして明白なる特徴を有する日本人性を造出しているのである。

神道は日本の・古代からの・国土にて発生したる宗教である。そして、それは、もともと教理の体系とも言わべきものを持っていなかった。

そこへ、北支那の倫理的教説たる儒教が到来して、日本の国民生活の発展を促した。しかし儒教は、宗教思想の領域においてよりは、法律及び教育の制度の領域において形而上学的背景を成していた。

仏教は公には五五〇年頃に日本へ輸入せられたのであったが、日本仏教は幹たる大陸の仏教からは全く異なる点を持つ枝と成っている、というのは、日本人は、常に初めから、極端にして過度に緊張せる諸見解を中和し

て、仏教が持っている諸種の象面を自分自身の諸の需要に適應せしめる傾向をもっていたから。日本へ輸入せられた仏教は主として大乘であつて、多くの礼拝様式や哲学体系をもっていた。しかし此の仏教も日本人の生活の中で多くの変化を受けたのであった。例すれば、アジア大陸においては「悟りの世界」というのは現象界を超越せるものについての・可能なる限り大なる了解を意味しているのであるが、それが日本においては、その意味が局限せられて、現象界内の事物の了解を意味するものとなった。故に、次ぎの主張がなされうる、即ち、日本人は現象界そのものを絶対者として容認し、そして現象界の外にある存在を容認することに反抗する傾向を持っているのである、と。日本には信ずるが、その信の対象を特定せざる人々が多いのは、これに基づくのであろう。また日本人は、キリスト教に関しては、無神論に傾くが、しかし、それにもかかわらず、宗教(宗教性)に対してのみ豊かな感情をいだいているのである。これに関しては、日本における状況はヨーロッパにおけるものと異なることを想起すべきである、即ち日本では全人口のわずかに一パーセントほどがキリスト者なのである。

二の2 西田幾太郎の神の概念

實在なるものは（われわれに）現われて来るがままの豊かなものであつて、自然科学から見られたる色も音もなく、暗く黒いものではない。これが西田にとりての實在である。そして此の現われて来るがままの實在の探求が彼の生涯を貫く課題であつたし、また宗教（レリギオン）が彼の哲学の帰結とも完成ともなつたのであつた。

彼によれば、純粹に物的なる世界は實際には存在して、それは人によりて考えられたものたるに止まる。眞實の自然は意識の具体的事實であつて、これは主観と客観とを包括している。そして眞なる實在は自己を統一する自己であつて、これは自然の背後に隠れている、故にそれは一個の全体であつて、それにおいては主観性と客観性とが分離してないのである。この二者の一体性は客観的世界と主観的自己との合一たるに過ぎぬもの、即ち相対的なものではなくて絶対的なものであらねばならぬ。この絶対的一体性がえられるのは、人が全く主観的な一体性を捨てて、それを客観的一体性のうちへ入らしめることによりてのみである。

「日本における神の探求」（川田）

故に絶対的一体性の世界は宗教の世界である。この宗教の世界とは人が自己を忘れて、ただ不可測にして高次元なる威力が唯だひとり自由に活動している性質のものである。それ故に神は此の無制限なる活動の根拠であつて、外界の内にはなくて、自己のうちに探求せらるべきである。われわれは、我々の心のうちにて、宇宙を秩序づけるものたる實在の根底を認識することが出来る。この宇宙の内部にて超越せる神は決して経験の対象とはなりえない。この意味にて神は「無」"das Nichts"と名づけられる、否定神学においてと同様に。これからみれば、神はニヒツであり、あらゆる否定である。これはクサのニコラウスやヤコブ・ボエーム、マイステル・エックハルトの主張するところ。事実、西田は此の見解へ傾いているのである。しかし彼の無の概念は決して純正なる否定ではなくて、否定神学の純正なる教説及びドイツ神秘説と全くは一致しない。というのは、彼の無の概念は「存在としての無」であるから、それは諸対立の統一である。この統一が西田の「神」即ち、全く超越していると共に同時に内在しておるもの、自己自身に矛盾するもの、である。若し人が実際に此の絶対無の意識により

て圧倒せられるならば、我もなく、また神もない、しかし絶対無が實在しているから山は山であり、水は水であり、存在は有るが儘に存在している。此の諸対立の統一、即ち宇宙と自己との最奥を内在しながら超越しているものを西田は絶対無又は神と名づけるのである。

故に此の神は此の世界と自己との外に存在しているのではない。というのは、神と此の宇宙との関係は芸術家と彼の作品との関係ではなくて、實在と現象との関係である。故に此の宇宙の創造者にして指導者としての神を西田は認めていないのである。彼にとりての神は、宇宙の内奥の彼方に在る所の絶対無であつて、そして同時に絶対的有である。故に諸対立の一体性によりて一切のものは絶対無であるとともに絶対有でもある。

西田によれば、思惟する自己もまた否定せられなければならない。若し、神は無であると考える自己も否定せられるならば、即ち無となるならば、絶対無が有ることとなる。

西田にとりて此の絶対無というのは、宗教的経験の、西方的表現よりも深き表現なのである。この西田の論法は、仏教のそれにより、日本人の思考方法に従うものであろう、

というのは、日本人の思考方法は観察せらるる出来事を固く執り、現象界そのものを絶対者とみなし、現象世界を越えて彼方に有るものを斥けるのであるから。

二の3 キリスト教の神概念への応用

右の如くに述べて来て、最後にフクダ師は此の日本の神概念をキリスト教へ応用する手懸りを示そうとする。そして彼は考える——若しも“*Verbum caro factum est*”(言葉が肉と成った)という事実が日本の思惟方法に従って実在の世界のうちへ包摂せられていらずれば、これを他の言葉で言うならば、若しも日本人の神概念がイエス・キリストにおける神の自由なる啓示への信仰を前提としているのであったとすれば、われわれは此の深い思想を利用して、この内在する神と神の秘密とを説明することができるでもあろう、と。

(1) 内在する神 日本人によれば、神は絶対無である。この神は、西田がパスカルの言葉を引用して言うが如くに、哲学者の神ではなくて、イサクの神、ヤコブの神、アブラハムの神である。神は常に「我れ」と共に、そして此の世界のうちにある、そして同時に此の世界を超越している。「私は生きて

いる、しかし、もはや、私がではなくて、クリストスが私のうちにて生きているのである(ガラテア書二、一九—二〇)」と使徒パウロは言う。これは、しかし、日本人にとりてもまた宗教的事態なのである。

(2) 神の秘密 現代の神に関する問題のうちにて最大の意義のあるもの、それは此の基礎的なる問題、即ち、神の啓示が人類の歴史のうちにて起りたることを承認するか否か、ということである。此の神の啓示を否定する者は、彼が如何に絶対者又は超越者を容認しようとも、彼は汎神論におちいり、果てには唯物論へおちいる危険にさらされていく。このことは現代の日本人に妥当なことである。

かくの如き日本人とキリスト者との神概念の差異を前提しておいて、フクダ師は、日本的思惟方法をキリスト者の神の秘密へ応用しようとして言う。若し人間が彼の自然的能力をもって神の存在を探求すれば、彼は遂に一柱の認識せられたる神へ到るが、その神は物言わぬ神又は寂黙である。神の存在に関して我々は言う、神は隠れたる神である、と。われわれが神の本質を問うときには、神は隠れている、神は絶対的に不可解である、とい

うのが真実である。神の言葉は此の寂黙のうちから出て此の世界へ入り来ったのである。しかし此の言葉は神の不可解性を除去しはしない。父より他に子を知る者はなく、また子と、子によりて・それが啓示せらるる人との他には父を知らない(マタイ十一・二九。ルカ十・二二)。

そして最後に、神の子は人間のために十字架で死した、世界の創造者が彼の被造物のために死したのである。神の人間に対する此の愛が神の最大の秘密である。マルセルの言うが如く、われわれに対する人間の愛が既に秘密であるが、われわれに対する神の愛が隠れたる秘密であるとして、それは不思議ではない。この秘密は人間の知性にとりての問題ではなくて、人間の実在そのものに、又は全人類にかかわるものである。神の言葉は神の寂黙から出て此の世界へ入り来ったのであるが、しかし神の秘密は永遠に秘密である。

三 評語

(1) 「日本における神の探究」という表題はたしかに内外の人々の注意をひき、関心を集めるものである。しかし、一読して後、考えさせられるのは、その神が何であるか

ある。「日本における神」ならば、われわれは記紀や祝詞の神々を直ちに想起する。しかし、それ等の神については、頁数の又は時間の制限のためか、さほどに論じられていない。また或は日本人が聖書の神を求めることなのであろうか。このことが中心的に考究せられていたとも考えられない。

(2) 然らば何か。著者は東方と西方との区別を、しっかりと眼中に持って、西方との比較において、日本人の考え方は現象即絶対者論或は現象即實在論であるとする。そして近代日本の大哲学者西田幾多郎の無の哲学の絶対無たる神が日本人の探り求める神であるとするものの如くである。即ち著者は「日本人達によれば、神は絶対無である」(三六七頁)と書いている。しかし、これは西田の神をもって日本人の神とするものであって、古来の日本人の神ではない、というのは西田の神は、仏教から多くの影響を受けながらも、明治・大正・昭和前期という西洋哲学の研究及び受容の時代の、すぐれたりとはいえ、一人の日本人が考えた神、即ち、「哲学者の神」である。それはイサクやヤコブやアブラハムやの神でもなければ、神道の神でもなく、仏教の覚者でもなく、儒家の天でも、道家の無

でもない。それは、勿論、東洋のものに強く引かれているが、しかしプロチン、アウグスチン、ヨハネス・エリゲナ、エックハルト、パスカル、フィヒテ、ヘーゲルなどの、要するに、ヨーロッパの形而上学又は神学の感化の下にある一人の日本人哲学者によりて考えられたる神である。

(3) 然るに、此の絶対無たる神は聖書の神であるかの如くにして、それではなくて、現象絶対者論をとっている多くの又は総べての日本人の神であると、著者は理解しているのである。

(4) この理解に基づきて、著者はキリスト教が抛りて立つところの「言葉の受肉」、「神からの啓示」という人類史又は世界史の事実を「現象絶対者論」の「現象」のうちへ包括せしめるならば、絶対無で神はあるとする日本人はキリスト者たりうると考えている。しかし、これは、著者自身も気がついているが如く、大なる仮定を立てて、それから帰結を引出すことである。しかし仮定は仮定であって、生きている事実ではない。この仮定が生きている事実となるがためには日本人が聖霊の体験を持たねばならぬ、というのは「聖霊によるに非ざれば、何人もイエスを主なり

と告白する能わず(コリント前書十二・三)」と言われているから。

(5) かくの如くであるから、「日本における神の探求」というのは日本人をして聖書の神を探求せしめ、日本人をして此の神を信じしめることなのであろうか。これは、しかし、なかなか困難である。というのは一方の全く固有なるものから他方の全く固有なるものへの移行は、ほとんど全く、ありえぬ事であるから。両者はどこまでも併立するのであろうか、或は共同の根元を、遂には、見出すのであろうか。